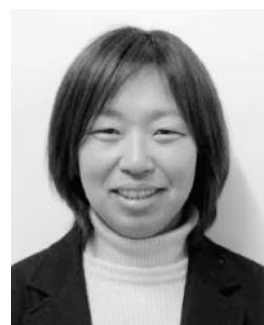


**命を尊重し、思いやりの心で
問題を解決する子の育成**
～動物介在教育を通して～



中央区 鈴谷小学校 生活科主任 **遅 澤 麻奈美**

1 はじめに

本校では、平成21・22年度の2年間、さいたま市教育委員会の研究指定を受けて、「動物介在教育」を研究してきた。

2 研究の概要

研究を始めるにあたり、「命ある動物をどのように教育の中に組み入れていけばよいのか」「命には休みがないことを踏まえて、平日及び休日の動物の世話をどうすればよいのか」などを手探りの状態から進めてきた。児童の実態として、飼育小屋の鶏や校内の池に生息する魚や亀の飼育を行っているが、全校児童での関わりは薄い。また、動物飼育の経験がある家庭は多くはない。児童の多くは「動物が好き」というものの、その大半は容姿で判断しているというものであった。

2年間の研究を通して、本校では、年間を通して命とふれあい、命を育む活動を主体的に取り組むことで、『命を尊重し、思いやりの心で問題を解決する子の育成』という研究テーマに迫ることができると考え、2年生の生活科でモルモット、3年生の「総合的な学習の時間」でチャボの飼育活動を取り入れた。

現在2年生は、昨年の3学期、2年生から引き継いだモルモットを各クラスで1頭ずつ飼育している。教室での飼育活動は、グループで日替わりで行っており、楽しんで取り組んでいる児童が多い。週末は各家庭にホームステイという形で飼育ボランティアを募り、

飼育していただいている。

3 研究の内容

(1) モルモットの導入まで (1年目)

- ①生体と飼育環境の整備
- ②年間指導計画の見直し

(2) モルモットの導入後 (2年目)

- ①生活科での授業実践
 - ・ゲストティーチャー（獣医師）を招いての学年合同授業



- ・1年生への引き継ぎの授業

②常時活動としての飼育活動

朝休みと昼休みを中心に行っている。帰りの会で気づいたことを報告している。当番は生活班ごとに毎日交代していく。

③ホームステイボランティアによる休日の飼育活動

年度当初の懇談会でモルモットをクラス飼育することを保護者にも伝え、週末のボランティ



アを募った。受け入れが決まらない日があれば、担任が持ち帰ることにしている。昨年度は数回あったが今年は今のところ担任の持ち帰りは一度もない。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ・ 昨年度、モルモットとの出会いの授業において、全国学校飼育動物研究会事務局長中川美穂子先生をはじめ、8人の獣医師の協力を得た。また、飼育するモルモット3頭のほかに他校より3頭借り入れたことで十分な数の動物を準備できた。そのため、児童も大変意欲的に活動でき、その後の飼育活動への動機付けができた。さらに、土曜参観日を行うことにより、その後ホームステイの協力等に関わる保護者にも、命には休みがないことを十分理解してもらうことができた。
- ・ 本年度は飼育2年目で、児童も、長期休業中に日直として全員が世話をした。教員も扱いに慣れ、スムーズに活動が行われている。昨年度、世話の仕方をわかりやすくまとめた飼育マニュアルを作ったことや、昨年度飼育した児童や保護者からのアドバイスなどが生かされた結果である。
- ・ 継続飼育を行うことで、糞の状態から動物の体調を考えようとする心や、動物の気持ちを慮ろうとする心が育ってきた。
- ・ 児童の中には、生きものが苦手だったりこわいと感じたりする子もいた。しかし、日常的に教室という身近な場所にいることや、友達が楽しそうに接する様子を見ていくことで、世話を遠くから眺めるだけだった児童の多くは、近づいてみることから、えさやり、なでてみるなど、



距離が近づき、抱っこができるようになった。初めて抱いたときに、「モルモットってあつ

たかいんだね。」と、言った児童もいた。

- ・ 当番の日は、朝も、休み時間も世話に追われてしまうので、最初は「遊びに行けない」と、嘆く児童もいたが、「自分たちと同じように、モルモットの命にもお休みがないから欠かさずご飯をあげたりお家をきれいにしたりしなくては」と、当たり前のように世話ができるようになった。
- ・ モルモットの引き渡しの時間に幅を持たせたことで、ホームステイを受け入れてくださる家庭も増えた。また、児童が世話に慣れているので家庭でも大きな混乱もなく過ごせたようで、学校に返すのがさみしいと感じたり、またあずかりたいと言ったりする声が多かった。



- ・ 引き継ぎ式を行うことで、モルモットとの別れを惜しみつつも、モルモットを大切に育ててほしいという思いを1年生にしっかり伝えることができた。3年生ではチャボを飼育するが、出会いもスムーズに行えた。

(2) 今後の課題

- ・ 飼育動物の健康管理のためにも、定期的な身体測定を行っていく必要がある。今後、モルモットの具合が悪い時の週末のボランティアの実施について検討する必要がある。
- ・ 本校は、PTAのイエローシートキャンペーンの収益で全てのえさを購入して貰っている。しかし、継続飼育をする上での費用の確保は、学校全体として考えていかなければならない。
- ・ 家庭との連携を更に深め、継続飼育体制を充実させていく必要がある。
- ・ 飼育動物の生死に関わって、いかに命のバトンタッチをさせるか、その手だての検討とその後の検証が必要となってくる。